

がせ(百合若) 按じるに輪寶船といふことぞ、船に輪寶次條を見よ)形の水を彈く装置した船のことであらう。和漢船用律に「輪妨。後太平記に輪妨には急輪の水彈火。生輪を用と見えたり、從軍詩に連妨敵萬艘、注に六輪に曰、武王射を伐時河に出呂尚右將たり、四十七艘の妨を以て河を障と見えたり」とある。

*りんぼう 因果の小車の輪の輪寶に刻みつけ(蟬丸)りんぼうの岩を割り醉象の荒れたる勢(國性爺後日)

〔輪寶〕轉輪聖王の感得せる寶器の一。旋轉應運、威伏の一切の諸權を具有し、聖王遊行する時輪寶自ら轉進して、土地を平坦にし障礙を破碎すとす。

*りんもじ 御かもじ様りんもじにまづお暇といふ籬、圍ひ置かれし下邸(松風)品よく慕へ慕ふとて誰かりんもじに輪丁花(露迦)

〔松文字〕情氣の文字詞、情氣。文字詞は足利時代の末期、朝廷式微にして供御のもの備はらない爲に、女官等その名を呼ぶを忌んで何れもと言ふた露語より起つたといふ。

露迦如來誕生會のこの文に「輪丁花」とあるは、ちんちやうげ(沈丁花)を配つて「情文字りん丁花」と頭韻を踏ませたのである。

*りんあ 輪廻の塵の置古(卯月潤色)輪廻を離れぬまうぜいの雑兵(弘徽殿)過ぎし事を輪廻深く言ふ氣はさらさら無いものな(薩摩歌)

十藏杖を振切つて、エエ輪廻したる女かな(田世景清)戀しゆかしは迷の(は)じめ、逢ひた見たさば輪廻の業(三世相)

〔輪廻〕衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道を輪轉することと車輪のめぐるが如きによつていふ。よつてまた輪廻妄執といひ、輪廻を妄執、執念の意にいふ。弘徽殿猶房家のこの文につきては「春は梢に咲かす待ち云云」をも見よ。

〔輪廻〕衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道を輪轉することと車輪のめぐるが如きによつていふ。よつてまた輪廻妄執といひ、輪廻を妄執、執念の意にいふ。弘徽殿猶房家のこの文につきては「春は梢に咲かす待ち云云」をも見よ。

る

*るふ 道大親子は世間流布の重罪、上を犯すといひ只今の始末諸人の見せしめ(反藤香)頼平殿の今宵討たれ給ふとは、世間のるふに隠れなし(関八州)

〔流布〕世に弘まることぞ、水の語方に流れ布くに喩へた語。世語。うはさ。

るりいろ (三世相) 〔瑠璃色〕瑠璃の如き色、即ち紫色に似た紺色。

るるえふ 清和天皇の後胤足利の類 萊斯波左衛門尉源義將(雪女)

るるせつ 線綫にいましめずんば忽ち國のやぶれとなる(浦島)御繼母持統天皇を押籠め線綫に苦しめ奉れば(持統天皇)

〔線綫〕縹の末葉。〔類葉〕類葉の末葉。〔忽ち〕國のやぶれとなる(浦島)御繼母持統天皇を押籠め線綫に苦しめ奉れば(持統天皇)

るるせん 鬼界が鳥の流人歸洛の船はいづくまで参りしぞ、るるせんなどばなされずか(平家女護鳥)

れ

れいぎよ 唐土の聖代にも囹圄と名づつて國を治むるそなへとす(浦島)

〔囹圄〕牢獄。風俗通に、「周曰囹圄、囹圄也、囹圄也、言令人幽閉思愆、改惡爲善。」

*れいし (用明天皇) 〔令旨〕「りやうじ」と訓むべきである。唐書、中宮・親王の御詞を文書に認めるをいふ。太平記大全六に「令旨。リヤウシ、シの字は濁りてよむ。文選三十六注云、秦法皇后太子稱令旨、命也、又通鑑綱目第三日、張晏曰太子稱家、故曰令、又三十八云、太子之命謂之令也。」

*れいじん (聖德太子)(三世相) 〔伶人〕舞樂を掌る人。樂人。左傳、成公九年の條に「伶人」とありて、左丘明傳に「治氏世掌樂官而善之、故後世名號樂官爲伶官。釋文云、依字作伶、……呂氏春秋、古樂篇、昔黃帝令伶倫作爲律、……」撰言字考節用集人倫門に、「千字文註、伶倫伐竹造管吹之、因號樂人云爾。」

れいせい (淨瑠璃文中の註記) 〔冷泉〕淨瑠璃の節に冷泉また三重などいふ名目さきざり、そは皆よりどころある事にて三河國矢矧の長が淨瑠璃姫に、牛若丸の戀せし事を十二段に作りし物語に、節附をし

て語りけるに、かの物語の更科冷泉諸共といへる、侍女の立ち出づるところの冷泉といふ文句の節を、冷泉よりふ節の名とれり。

れい

*れいならず 行房朝臣の御臺所御心地例ならず(岡田川)

〔不例〕違例に同じ。病氣をいふ。源氏物語・空齋の卷に「例ならぬ人侍りて」など見えて

*れいみん 上一人より公卿大夫、下黎民に至るまで(嵯峨天皇) 〔黎民〕黎は黒の義。民の首皆黒いが故に黎民といふ。庶民に同じ。書經・典篇に、「黎民於變時雍。」

れいりん れいりん舞樂の聲ならで、耳にも觸れず目にも見ぬ賤女山樵の戯歌(嵯峨天皇)

〔伶倫〕伶人(その條を見よ)に同じ。樂人をいふ。伶倫はもと支那古代の樂人の名。呂氏春秋古樂に「昔黃帝令伶倫作爲律三云々。」

*れいれい 華臺寶鐸環珞は西吹く風にれいれいとい、いと珠勝さ限りなし(三世相) 識情天地れいれいとす(朽ちせぬもの)(天智天皇)

〔麗麗〕はなやかな貌。明らかな貌。僅言集覽に「れいれい。明らかなる意なり、レイレイたり、又レイレイとして居るなどいふ。」

れいろろ 八面玲瓏と明かに(用明天皇) 〔玲瓏〕光のすきとほる貌。白居易の詩に「樓閣玲瓏五雲起。」

今遷化の跡までも、我が親は講中の第一(青庚申)

〔了海〕正徳四年大阪町中を動進し、貧窮人救恤に盡した高僧である。濱松歌謡集、揚海奇觀、卷二十四、正徳四年の條に「十一月十五日より二十日迄了海和尚町中を動進して、堀江あみだ池和光寺にて貧窮人へ白米二合づつ施行、凡米銀二十斗りを以て毎日踏出せり、群集夥し、是より町家富人も米銀或は白かゆを施すもの所々にあり。今年秋作五穀高直に付、米一石代貳百三十圓餘也、了海和尚和光寺にて施行米凡人數三十四萬人餘、此米代銀百二十圓目録。

*れうげ ちつとしたれうげ 進で物思はせたいとしやの(青庚申)
「れうげん」(料簡)の約つた語。「れうげん」を見よ。昨日渡今日能物語に、大黒を梵妻と思違へたことを記して、「或寺に名作の大黒のあるよしを聞及びたる檀那奔りて、一目見たいと所望する、……御存知の上ちや程に御目に懸けうとて、これんなうちとお出やと呼出すを見れば、年ごろ十六か十七ばかりの未だわきの下のふくろびたる、みめ形はいはう所もない美人なり、此様なるりやうげがひはあるまいと見えたる、りやうげは「れうげ」である。

*れうげん 聲高に言はずともれうげんづくがよいわいの(丹波興作)
「料簡」に、「料者理也量也、節操同、大傳節、車馬也、即量取選擇之義。書言字考節用集に、「集賢、料、度也、節、選也、出後讀書。」

*れうじ れうじな事をいひかけ後悔するな(曾根崎) やい九右衛門聊爾するな、割符渡す言分あるま(博多)

「聊爾」(聊爾) 粗忽。書言字考節用集言辭門に「聊爾、率爾義同。」

*れうそく れうそくも持合はせ候今川了徳 北白河の廣文と申す者より料足五十貫文に買取ると聞く(酒吞童子)
「了徳料金。」足は錢をいふ。あしを見よ。れうたつ 二世了達守曼陀羅維摩(大尊)

*れきこふ 「了」(了) 了通達すること。法華經。相要品に「深人三禪定了達諸法。」

*れきせつふう 身體痛み苦しむこいひつべく(睡天慧)
「脈節風」(脈節風) 脈節を指す。關節の疼痛激甚な病氣であつて、その病狀は白虎に咬まれるやうに疼むのを白虎脈節風といふ。覆戰萬安方二に「脈節風者由血氣衰弱、爲風寒所侵、血氣凝滯不得流通、關節筋筋無力以波寒、眞邪相薄、所以脈之節悉皆痛疼故謂之脈節風也、痛甚則便二短氣汗出、肢節不可屈伸。」

れそ いかう 酒臭い、過しやるな過しやるな、明日は早早人遣らう、それそが言傳したぞや、近日一座一致したい(冥途飛脚)
「それ」(其の) 詞。それを「れそ」といひ、「これを」を「れこ」といひ、體語に詞を用ゐる。蓋し或物について其名を明かに言はないで通じ、「れそ」「れこ」は話相手の者に其意通じるときに用ゐる言言葉である。冥途飛脚のこゝの文の「れそは、八右衛門の知合ひの遊女をいうたのである。」(谷嶺軍記、第二に「人足廻しの茂次兵衛所にか、つて居て、

歩荷持しても踏けにくい物はれそちや、それに毎日飯を拂はにやならず」とある「れそ」は錢をいうたのである。新版歌藝文・野崎村の段に「和泉國石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、聊の事で家が潰れてから。」

*れんか うらがやうなめら、歌れんかにべる都人夢にも見やしめすま(女護屋)
「連歌」(連歌) 和歌の上の句(五七七五)を第一人が詠めば、第二人はその下の句(七七七)を詠み、第三人は第二人が詠んだそのまた上の句を詠み、かくして續けるを連歌といふ。故に連歌は全歌を通じては意味なく、下の句が兩方の上の句に共通するまで、長歌と違つて文線上餘り價値の無いものである。

れんかうのはかりごと 唐土には秦の始皇六國を呑んだる連衡の謀(國性爺)
「連衡之謀」(連衡之謀) 支那春秋戰國の世、蘇秦が韓魏趙燕齊の六國を合従して秦に當ることを説いたが、張儀出でて専ら連衡の謀を説き、六國を連て秦に事ふべきを説いた。衡は横と通じ東西をいふ。即ち六國相互の交を絶つて、西の方案に向つて事へしめるをいふ。

れんげろ 唐土晋の慧遠法師蓮華漏を刻み(用文等)
「蓮華漏」(蓮華漏) 時を計る具。翻譯名義集に「摩山遠公(慧遠)之門、有二僧器製者、患山中無刻漏、乃於水上立十二葉芙蓉、因波而輪以定十二時、最長無差、今日遠公蓮華漏是也。」

*れんじ いづれも御連枝の御なかとて源氏の御連枝判官様に逆上(連枝)兄弟の意、歴々の人の兄弟をいふ。蘇(連枝)兄弟の意、歴々の人の兄弟をいふ。蘇

武の詩に「況我連枝樹、與子同一身。」 *れんじ 民彌は姫を見失ひ、太夫はどこへ行つたと座敷の連子に取付(壬生大念佛) 細字をつらつらと南明の横橋子、影唇を動かせば無筆といひし空言も(基盤太平記) 西受の竹橋子、反故障子を細目に明け(冥途飛脚)

「種子」連子とも書く。寛裕子。 *れんじやう いて戒名に連社號號附け、引導して弔(人城)
「連社號」(連社號) 淨土宗では該號に蓮社または譽の字を入れる例がある。蓋し何史略下に「雷次宗宗稱證張劉通民國權之尊、白蓮華社、立三輪陀像、求願在壬生安養國、謂之蓮社」とあるに出たものであらう。譽號は五重相傳を受けた者に與へる。

れんじやく おもたくとも此葛籠脊負うて御歸り候へど、連じやくかけてしつかと負はせ(西玉母) 小わつばの姿に出立ち、肩にれんじやく(腰に鎌(佐々木))

「連衡」(連衡) 時を計る具。翻譯名義集に「摩山遠公(慧遠)之門、有二僧器製者、患山中無刻漏、乃於水上立十二葉芙蓉、因波而輪以定十二時、最長無差、今日遠公蓮華漏是也。」

*れんじやく くらげのとりにどりに聲のあやなす連雀や、思ふ中には名もつらき(娘)

「連雀」(連雀) 鶯に屬する鳥。雀よりも大きく全身褐色。喙扁闊で、頭上に羽冠がある。

*れんじよ 御合弟式部の冠者時定

れうげーれんじよ

二十三歳、その外れんじよ昵近の歴歴法華堂に群参あり(最明寺殿)いかに天女丸、來春よりは汝をも政道の連署に加ふべし(最明寺殿)【連署】鎌倉幕府職制の一。執權と共に公文書に署名する役なればこの稱がある。北條家の一族で重譽ある者これに任せられた。

*れんぜんあしげ 殿の御馬ばさび月毛、連錢茸毛、鹿毛茸毛(天鼓)

【連錢茸毛】白毛に黒い茸毛がある茸毛といひ、茸毛に淡褐色の圓い斑文の鏡を連れたやうになれる馬の毛色をいふ。

*れんちゆう さては鹽治殿の篠中か(兼好法師)

【篠中】公卿・大名の正妻の敬稱。

れんによ 箱に入れしは連如様の名號(今宮)

【連如】諱は兼壽、應永二十二年二月に生れ、明應八年三月齡八十五で遷化し、山城本願寺第八代の高僧である。深諳篤學で教行信誼、大要妙には殊に造詣深く、廣宗中興の人と稱せらる。畿内北越地方で描いた佛祖多く、自筆の名號は信徒の深く尊崇する所である。明治十五年慈燈大師の諡號を賜はる。

れんふくわいもん 連府槐門の位に上り、上見ぬ鷲と時めきし(藤靜)

【連府槐門】大臣三公をいふ。「連府」は徒然草第二百十四段に「晋の王徳大臣として家にはちすをうえて愛せし時の樂なり、これより大臣を連府といふ。「槐門」は周の世に三槐を外朝に植えて三公その下に班列した。槐は樹で人を懐ける義、轉じて三公の意にいふ。

*れんり 機綱の木の相生を連理の契に擬(曾根崎)

連理の枕・比翼の床、かたしく人も諸共になき

世の中の習(律國女史)

【連理】二樹相對し脈理を連接して生じること。よつて以て夫婦の契を連理の契といふ。白居易の長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願為連理枝、天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」。

ろ

ろろこく はや漏刻も夜半過ぎ(弘徽殿)

【漏刻】往昔用いた時計である。貞丈雜記卷十六に「古禁中に漏刻といふ物あり、銅の壺に水を入れて、壺の下に穴ありて水の滴漏るやうに作りて、其壺の水の中に筋を立てるなり、其壺を漏壺といひ其水を漏水といひ其筋を漏筋といふ、其筋に刻めを付け置くを漏刻といふ、其刻めの數は四十八刻むなり、一時の間を四刻四刻に定めたる物なり、此筋を水の中へ立置くと、水漏りて水の滿減るに隨ひて筋の刻め段々に見ゆるなり、二つの時を一つ見ゆるは子の一つと云ひ、二つ見ゆるは子の二つといふ、以下これに准じ知るべし云々」。

ろろじ そくばんどうに名の高きろろじ(六蔵が御供は、げに頼もしき働きなり(田村)

【ろろじ】ろろじといふ、六の符牒。この文の「そくばんどう」の「そく」は「の符牒」は「ばんどう」は八の符牒であつて「きり」の條を見よ、これを足の強いこと坂東に名の高き御人(和漢)三才回會卷七、人倫部に「一人、御人言羅、

和名久知止利、今云馬子、又云無萬加本、六蔵にいひかけたのである。六蔵又は八蔵は馬方の通稱である。

*ろろ屋形(大維冠)

【樓船】屋形船、類書蘇葉に「大船上に樓を施すを號して樓船といふ。かなやろろたいこ 兩の手に金輪、世間で諸ふ親子籠太鼓、跡は天鼓微塵(浦春聲)

【籠太鼓】曲名。この文は籠太鼓に入年の字をいひかけたのである。

*ろろく 三五郎守するならろろくにしやと喚き歸れば(天細忠)

おでんをろくに寝させて、母様もちとおやすみと言ひければ(女殺)どれどれもかげすみようこそ、サア先ろくにと挨拶も(嵯峨天皇)おのれなら尤もろくで果てまい奴ぢやと常に言うたが造うたか(母波與作)

正、または平の義。平安。完全。正圓を「まろく」といひ、陸地を「ろくち」といふ「ろくもこれである。

ろろかくのつづさや

【ろろかくのつづさや】を見よ。

ろろくく 重き六具に五體を釣られ、かつげと臥して足立たれば、鏝を着てさへその臍病、鯨波聞いたら目がまばう(川中島)

【六具】和漢名數に「六具」鏝(よろ)甲、貴、類、當、佩、脚、脚、と見え。單騎要略・五、鏝の六具は類當、鉢卷、淫、腰、扇、當、小手をいふ。和訓栞に「ろろく」俗に六具を占といふは甲をかためるより出たる詞也、僧家の六物などいふ事に倣ひたるにやといへ

ろろくわんおん(安夫史)

【六觀音】手観音、馬頭觀音、十一面觀音、聖觀音、如意輪觀音、准提觀音をいふ。或は准提觀音の代りに空齋觀音を加へてもいふ。

ろろくげのびやくさう 守本尊普賢薩埵・寶威徳上王佛の御國を出て、六牙の白象に鞭うつて(五人兄弟)

【六牙白象】普賢菩薩は六牙の白象に乗つてゐる。蓋し象の深沈で強大な力を持つてゐるやうに、よく定力を以て諸行を攝取することを具體化したものである。因果經二に、「爾時普賢菩薩觀轉胎時至、即乘六牙白象發三摩摩宮云々」。

*ろろこく 秦の始皇六國を呑んだる連衡の謀(國性彦)

【秦】支那春秋戰國時代の六國、即ち韓、魏、趙、齊、楚、燕をいふ。

*ろろこん 人間の念慮限りなく、息の通ふ間は六根の樂欲にひかれ(舟波與作)

打たるる弟子の六根淨、御目も眩み御息もばや絶え、地清淨に見えければ(彌迦) 天清淨、地清淨、内外清淨、六根清淨(卯月紅葉)

【六根】眼耳鼻舌身意の六根をいふ。「根」は草木の根の如く、増上の義で強き作用を與へるもの謂である。六根によつて作る罪障を斷除して得る所の力用清淨無礙なるを六根淨、六根清淨または六根自在といふ。六根によつて作る罪を六根罪障といひ、その罪障を斷絶して再び罪を犯さぬやうにするを六根斷絶といふ。